グランドツアーへと続く周遊の旅
ファインズ・モリソンの『旅行記』

髙橋　三和子

はじめに

初期近代イングランドにおいて、新大陸についての旅行記は、地理的な範囲の拡張を通して、読者に新しい世界の情報を提供するテクストであった。一方で、それまで巡礼記や古典作品を通して知られた世界であるヨーロッパ及びレヴァント地方を含む地中海地域を記した旅行記は、地域としての目新しさはないが、読者に新たな視点を示す面がみられた。本研究では、後者の旅行記からファインズ・モリソンの『旅行記』(1617)をとりあげ、その第一部であるヨーロッパとレヴァント地方の旅の記述を分析する。[1]まず、筆者モリソンの旅の動機とヒューマニスト達による旅の意義を探る。次に、モリソンの異国の街についての記述を同時代の旅行の手引書との関係から分析する。また、モリソンによる視覚的情報の提示法や情報の整理の仕方にも着目する。最後に、グランドツアーの流行へと続く流れの中で、モリソンの旅行記の位置づけを行う。

モリソンの旅の動機と教育的な旅

ファインズ・モリソンは、ケンブリッジ大学、バーゼル大学およびパドヴァ大学で学んだ経歴を持ち、「異国を旅して体験を得たいという生来の望み」から旅に出た。[2]モリソンの旅の動機は、異国（ここではヨーロッパ及びレヴァント地方）への興味が根底にあったと考えられる。また、モリソンは、『旅行記』の読者に宛てた序文において、テクストの理想的な読者は、旅行に不慣れな者たちであると述べる。[3]ここから、この旅行記は、初めて旅行に行くイングランドの若者たちに向けて書かれたテクストと推測できる。このような視点は、初期近代イングランドで芽生えた教育的な旅の概念を基盤としている。旅することは、ヒューマニスト達を中心に、知識を増やす活動として推奨された。本研究は、三部構成からなるモリソンの『旅行記』の第一部における旅の記述に着目する。この第一部は、タイトルにある 12 の地域についての旅行記である。モリソンは、タイトル及び序文において、‘[a]ll Monuments in Each Place Worth the Seeing’[4]あるいは‘all things there worthy to be seene’[5]等のフレーズを用い、見る価値のある物は何でも書き記したことを強調している。

このような異国であらゆる物を見聞すべきであるという考えは、同時代のヒューマニストたちによる旅の教育的な側面への注目に依拠している。例えば、フランシス・ベーコンは、『随想集』(1625)において、旅とは、若者にとって一種の教育であると述べ、異国で旅行者が見るべき、観察すべき物や場所を羅列している。ベーコンは、様々な物を挙げ、まんべんなく異国の街の基本的な事柄を見聞することを推奨している。[6]異国への旅行において、あらゆる場所を訪れ、多くの物を見るべきであるという考えは、ベーコンに限られた思考ではなかった。旅の仕方を紹介するテクストとして、16 世紀から 17 世紀にかけて旅のノウハウが書かれた旅の手引書がヨーロッパ及びイングランドで出版された。ヨーロッパで書かれたテクストの英訳版の出版に加え、イングランドでも旅の手引書が書かれ、出版された。例えば、アルブレヒト・マイヤーによる、学生や若者だけでなく、商人や兵士等異国を旅するあらゆる人物に向けて書かれた手引書がある。また、ロバート・ダリントンのフランスの見方を中心とした旅の指南書やトマス・パルマーの旅先で見聞すべき事柄を網羅したテクスト等もある。

トマス・パルマーの旅の手引書とモリソンの街の記述

本研究では、1606 年にロンドンで出版されたトマス・パルマーによるテクストに着目し、モリソンによる異国の街の描写を読み解く。パルマーのテクストは、タイトルにある通り「外国旅行をより有益かつ高潔なものにする方法について」書かれた旅の手引書である。[7]序文におけるパルマーの言葉によると、このテクストは、「旅行によってなされるであろう、またなされるべきである物事」について書かれたテクストであり、「これまで外国旅行においてなされてきた様々な誤りや誤解について考えるもの」でもあり、また「高貴な紳士である若者たちがより彼らの旅行を有益かつ高潔なものにするために」書かれたものである。[8]これらの言葉から若者たちによる教育的な旅を念頭においた旅の指南書であることが推測できる。テクストには、樹形図が添えられている。旅の指南書における樹形図の使用は、これまでペトルス・ラムスの影響があったことが指摘されてきた。ラムスの影響は、ジャンポール・ルビエスらにより、初期近代イングランドの旅行記の書き方への影響も指摘されている。[9]パルマーは、異国において調べるべき物事として、「名前、人口密度、地理的状況、地形、自然物と人工物の産物、不完全な物や欠落した物等の不良な物」をあげている。[10]これらの項目は、全てモリソンの街の記述にみられる。とりわけ、モリソンの記述は、パルマーが人工物のカテゴリーであげている「門、噴水、橋、教会、通り、宗教的建物、城、兵器庫、貯蔵庫、市場、取引所、 歩道、学校、図書館、大学等」[11]の描写を数多く含む。

モリソンは、これらの建物や場所を地域ごと、あるいは種類ごとに記している。

モリソンの記述の整然さとパターン化

モリソンのテクストには、詳細な目次と小見出しがあり、読者が、調べたい街に関する情報を簡単に見つけられる工夫がある。モリソンの記述の整然さは、同時代の他の旅行記(ジョージ・サンズの『旅の記録』(1615)やトマス・コリアットの『コリアットの半生道中記』(1611))と比較しても群を抜いている。モリソンの街の描写にはパターンがあり、とりわけ主要な都市の描写は、地図的な挿絵とともに整然とした印象を読者に与える。ヨーロッパのヴェネツィア、ナポリ、ローマ、 ジェノヴァ、パリの街の記述では、挿絵とそのキャプションの後に、歴史的建造物、市場、門等の主要な場所の説明が続く。主要な場所を説明する際、挿絵への言及が度々行われることにより、読者は街全体の図と各場所の位置を常に意識する仕組みになっている。このような傾向は、エルサレムとコンスタンティノープルの街の描写においてさらに強くなる。本文全体が、図版に書かれた各場所のキャプションの機能を果たし、記述も挿絵同様に鳥瞰的視点を基本とする。モリソンによる街の記述は、分量や順序の差こそあれ、街全体を見下ろした視点から描かれる特徴を持つ。街を鳥観した視点から、挿絵とともに主要な建物等を順に説明していく方法は、読者に街の主要な場所を分かりやすく提示する。

グランドツアーへ

モリソンの『旅行記』は、同時代の旅行の手引書が勧める見るべき場所を中心に記され、その記述法には、読者が街の主要な場所を調べやすい工夫がみられる。これらの点から、モリソンのテクストは、自身の言葉の通り、旅の初心者向けに書かれたものであり、異国の街の基本的な事柄を記したものと考えられる。このような地中海地域の街への視点は、後のグランドツアーの流行に繋がる先駆的なものであったといえる。例えば、グランドツアー初期のテクストであるリチャード・ラッセルズによる『イタリアの旅』(1670)は、モリソンの旅行記と同様に、街の主要な場所を簡潔に記す特徴を持つ。17 世紀初めから、イングランドでは、様々な目的を持った旅行記が書かれ出版されたが、モリソンの『旅行記』には、一つの明確な方針を読み取ることができる。すなわち、ヨーロッパ及びレヴァント地方の街の基本的な場所や物事を分かりやすく読者に提示するという方針である。これは、その後の大陸旅行の主流となるグランドツアーの思考に通じるといえ、モリソンの『旅行記』は、17 世紀初めのイングランドで出版された旅行記の中でも、次代の旅行を予感させる先駆的なテクストであったといえる。

---

[1] Fynes Moryson, *An Itinerary Written by Fynes Moryson Gent. First in the Latine Tongue, and Then Translated by Him into English: Containing his Ten Yeeres Travell throvgh the Twelve Domjnions of Germany, Bohmerland, Sweitzerland, Netherland, Denmarke, Poland, Jtaly, Turky, France, England, Scotland, and Ireland. Diuided into III Parts. The I. Part. Containeth a Iournall through All the Said Twelue Dominions: Shewing Particularly the Number of Miles, the Soyle of the Country, the Situation of Cities, the Descriptions of Them, with All Monuments in Each Place Worth the Seeing, as Also the Rates of Hiring Coaches or Horses from Place to Place, with Each Daies Expences for Diet, Horse- Meate, and the Like. The II. Part. Containeth the Rebellion of Hugh, Earle of Tyrone, and the Appeasing Thereof: Written Also in Forme of a Iournall. The III. Part. Containeth a Discourse vpon Seuerall Heads, through All the Said Seuerall Dominions.* (London: John Beale, 1617) STC 18205. *本研究の引用は、以下の版を使用した。Fynes Moryson, *An Itinerary Containing his Ten Yeeres Travell through the Twelve Dominions of Germany, Bohmerland, Sweitzerland, Netherland, Denmarke, Poland, Italy, Turky, France, England, Scotland, & Ireland*, 4 vols (Glasgow: MacLehose, 1907–08).

[2] Moryson, I, p. 2.

[3] Moryson, I, 'To the Reader'.

[4] 初版 (Moryson, *Itinerary*, 1617) のタイトルの一部。

[5] Moryson, I, 'To the Reader'.

[6] Francis Bacon, *The Essayes or Covnsels, Civill and Morall, of Francis Lo. Vervlam, Viscovnt St. Alban. Newly Enlarged.* (London: Iohn Haviland, 1625), pp. 100–04.

[7] Thomas Palmer, *An Essay of the Meanes How to Make our Trauailes, into Forraine Countries, the More Profitable and Honourable.* (London: H[umphrey] L[ownes], 1606).

[8] Palmer, 'To the Reader'.

[9] Joan-Pau Rubiés, 'Instructions for Travellers: Teaching the Eye to See', *History and Anthropology*, 9 (1996), 139–190.

[10] Palmer, 'The Rest of the Second Part, Abstracted', before p. 35.

[11] Palmer, p. 87.